

『性フェロモン外分泌症候群』。

それが私の診断名だった。

発症するのは極一部と珍しく、日本国内でもほぼ認知されていない病気。

その病気の症状は、名前の通り、性フェロモンを分泌しすぎて周りに悪影響を及ぼす。具体的に言うと、私の周りにいる人は私に対してムラムラしやすくなる——らしい。

小学生の時は男子にボディタッチされることが多く、中学生の頃からは町中で知らない男性に声をかけられることが多かった。高校生の頃になると電車やバスでの痴漢が毎日のように発生した。日々悪くなっていく傾向に、電車ではなく自転車に切り替えて通学することになった。痴漢はなくなったものの、男性からの舐められるような視線がなくなることはなかった。

そして大学生となった現在、日常生活すらままならないほど支障をきたしていたため、自身の症状について調べてもらうことにした。

最初はどこへ行けばよいのかも分からない状態だったけど、親の薦めで内分泌内科を転々としながら診療してもらい、ついに『性フェロモン外分泌症候群』という病気であ

ることが判明した。

そしてこの性フェロモン分泌症候群を抑えるためには、好きな男性と日々エッチをすることが一般的な解決方法だということを伝えられた。

——と言われましても、付き合っている男性はいない。

そう正直に打ち明けると、この症状は患者数が少なく、非常に珍しい病気でもあるため、研究機関へのデータ提供という選択肢もあると説明され、研究機関を紹介された。そして私は日々悩まされているこの症状を改善すべく、研究機関に治療及びデータ提供することになったのであった——。

一日目

データ提供の話があつた時、今すぐにでもお願いしたい状況ではあつたものの、集中的な診察と治療、さらに経過観察を行うということで、五日間をかけて入院という形を取ることにした。

五日間も大学を休むことはできないため、夏季休暇を利用しての入院となった。

研究機関ということ硬質な雰囲気が漂う中、私が案内されたのは、ふかふかのベッドやソファが置かれた、クリーム色の柔らかな雰囲気の部屋だった。

「佐倉さん、それではこちらに座っていただけますか」

案内してくれたのは、黒髪の似合う青年だった。この男性もきつと研究機関の職員なのだろう。

すっきりとした鼻筋、涼しげな目元という整った顔であり、優しげな笑みと口調に、緊張を和らげようとしてくれているのが分かる。

イケメンで二十代ぐらいの若い男性がお相手として来てくれたのは、私への配慮なのかもしれない。

促されたふかふかのソファに座ると、男性はその前に座って私と視線を合わせて説明をしてくれた。

「佐倉さん、『性フェロモン外分泌症候群』の診察と緩和ケアをこれより始めますが、

大丈夫でしょうか？」

「は、はい……」

緩和ケアだから、きつとこれから『そういうこと』をするのだろう。

私は気恥ずかしくて、こくりと頷きながらうつむいた。肩までの髪が流れて私の顔を隠す。

「嫌なことがあつたら止めますので、遠慮せずおっしゃってくださいね」

男性が私の横に座りながらほつたをさらりと撫でる。

骨ばった、女性とは異なる異性の手に、私の身体がぞわぞわと震える。

視線を彷徨わせると、男性の胸に『空野（そらの）』と書かれた名札が見えた。

「佐倉さん？」

「はい？」

呼ばれて空野さんの方を見ると、ばつちりと視線が合った。

「なるほど、視線が合うだけでこんな感じですか」

「……？」

「診察も兼ねていますので、あなたとの接触による影響も後ほど診療録に記入する必要があります」

なるほど、と思っていると、目の前の空野さんの顔が近づいてくる。

まつ毛、長いなあ……なんて少し現実逃避のように考えていると、ちゅ、と唇が重なった。

私は今まで誰かと付き合ったことはないけど、これがファーストキスではない。

ファーストキスはすでに小学生の時に、名前も知らない男子にふざけて奪われ済みだった。なんて悲しい。

空野さんはそのまま、啄むようなキスをちゅ、ちゅ、と繰り返す。

薄めの唇に、私の唇が食べられているようで、こしょばい。

「ちよ、ちよっとくすぐりたいです……っ」

恥ずかしさも相まって思わずさういうと、今度は角度を変えて舌がぬるりと私の唇を

舐め上げる。

「……!!」

こんなキスは初めてだった。

思わず口を開けて息を吸った瞬間に、空野さんの舌がにゅぶ、と私の口内に侵入する。

「う……む……」

息を吸うのも吐くのもタイミングがわからず、息を止めて空野さんの舌に翻弄される。私の舌に絡まったり、かと思ったら、ぢゅつと音を立てて吸われたり。

「ふ……あ……♡」

ぴりぴりと舌から伝わる刺激に、頭がぼーつとしてくる。

私の首に添えられていた空野さんの手が、気付いていた時には肩を撫で、そして胸のあたりに落ちてきていた。

やわやわと服の上から胸全体を撫でられ、さらなる刺激に私の身体がびくつく。

「うつ……ん……♡」

なおも空野さんの舌は私の舌に絡みついてくるので、もう、息が苦しい。

いつのまにやらブラジャーのホックが外され、私の胸が一瞬開放感を感じる。

すつと唇が離れた瞬間に、私は大きく息を吸った。

ブラジャーがぐいつと上にずらされ、空野さんの両の手のひらが私の胸を直接包んだ。

「んっ……♡」

丁寧に優しく、もにゅもにゅと触られる。

痴漢にあったことは数しれないが、こんなに優しい愛撫は初めてだった。

空野さんの親指が、胸の先端をくるりと刺激し、じんじんと甘い感覚が広がる。

「はア……♡」

空野さんの手は休みなく私の胸をいじりまわしている。

薄く色づいた先端をこすられて、知らず身体が跳ねてしまう。

空野さんの髪の毛が胸のあたりにさらりと流れてきて、こしょばいなと思うと、ぬるりとした感触が胸に伝わってきた。優しく、優しく、乳輪の周りを空野さんの舌がなぞっている。

片方の胸は、相変わらず大きい手のひらに包まれて先端をしごかれていた。

「あんっ……♡」

びくびくっ♡と身体が反応するのを止められない。

焦らすように、ゆっくりと這い回る舌。

空野さんの柔らかい舌がついに乳首を舐め上げると、びりびりとした感覚が私を襲う。

「んんっ……♡」

ぬるぬるとした感覚が、気持ち良い。

胸を触っていた手が、脇腹へと下がつていき、お腹、そして太ももへと移動する。履いていたスカートをたくし上げられ、つつ……と内側を撫でられた。

（あそこも、触られる、んだよね……。）

空野さんの手が下着の上から撫であげると、ぬる、と冷たい感触が伝わる。

「気持ち良いですか？」

空野さんに突然話しかけられて動揺する。

「えと、き、気持ち……いい……です……」

消え入りそうな声で答えると、空野さんが優しい目をして再びキスをする。

ちゅ、ちゅ。

小鳥のような可愛いキス。

でも、手は私の濡れそぼった箇所を確かめるように、下着越しにゆるりとなぞっている。恥ずかしい。

空野さんの手がふいに私の膝下に差し込まれ、そのままふわりと抱えられた。

「!？」

気が付いたらお姫様だっこをされていて、びっくりしている間に、空野さんは私をソファからベッドへと運んでいた。

今から空野さんとそういうことをするのだ、という意識がまた戻ってきて恥ずかしくなる。

履いていた下着をするりと取られると、ひやりとした空気を感じた。

「痛くないように、気持ち良くなりましょうね」

空野さんがそう言い、顔を私の秘所に近づける。

「えっ……そ、……ひゃんッ！」

空野さんの舌が、べろり、と私のあそこを舐め上げた。

一番敏感な先端を舐められている。

「んああっ……ああ……♡」

耐えられないほどの甘い刺激が私を襲う。

足も腰もびくびくびくっ♡と勝手に動くのが止められない。

気持ちいい、という感覚と、出会ったばかりの空野さんに、汚い部分を舐められて申し訳ないやらの気持ちがないまぜになる。

ちらりと下を見ると、空野さんも私の秘所を舐めながらこちらを見ていて、視線がばかりと合う。

くくく！
恥ずかしすぎる……！

耐えられなくて顔を手で覆う。

ぬるぬるとした感覚が花芯をずっと刺激していて、気持ちよすぎて喘ぎ声も止まらない。

「んんッ、あつ、は……っ♡」

なすがままにされていると、どろどろに溶かされた秘所に圧迫感を感じた。

ずぶ……♡

空野さんの指が、一本、私の中に入ろうとしていた。

ゆっくりゆっくりと、痛くないように気を遣われているのが分かる動き。

太い指が中を擦り、外側では柔らかい舌によつて花芯に甘い刺激を与えられる。

「ああ♡あんッ♡」

それは今までに感じたことがない刺激だった。

両方触られるの、気持ちよすぎる……!!

くりくり、と舐められたり、ぢゅつと吸われたり。指もずぶずぶ、ぐりぐり♡と中を刺激していて。

絶え間ない刺激に頭がおかしくなりそうだった。

「いつ……♡♡」

イクと、言った方が良いのか、どうなのか。分からないけど、私はもう果ててしまっ
そうだった。

ぴんと足がつっぱって、頭が真っ白になっていく。

びくっ、びくっ、と大きい波が来て、私はイッてしまっていた。

空野さんは頭を離し、指をゆるゆると私の中で動かす。

「はっ……はぁ……」

下の圧迫感が増したかと思うと、空野さんの二本目の指が挿入されていた。

「……もう少し慣れさせますね」